まえがき

日本語の談話は何を伝えているか、談話の中に使われる言語表現は何を表現しているのか、もっと具体的には、言語のひとつひとつの表現がディスコースという現象にどのような効果をもたらすのか。筆者はこれらの問いにいろいろな方向から答えてきた。それは『会話分析』で説明した分析方法であり、『談話分析の可能性』で試みたアプローチであり、そして『情意の言語学』で探求した言語理論であった。

本書は談話言語学という立場から、日本語のディスコースはどんな様相を見せているか、という問いに答えるものである。言語の主体が創り出すディスコースには、何がどのような方法で、それぞれどのような意味を実現するのか、という素朴な疑問に答えたい。言語を談話という視点から見た時、何がどのように、どんな技法を駆使することで表現されるか、ある言語の文法現象や語彙は談話の中でどのような役割を果たすのか、という問いである。

今回談話言語学という表現を使うのは、研究の領域やアプローチをはっきりさせるためであり、それは新しい言語理論でもないし、新しい分析の枠組みでもない。従来筆者が試みてきた研究の基本的態度は変わっていないのだが、談話から出発し談話に到達する言語学という意味を込めて、談話言語学を試みたい。談話言語学のアプローチでは、あくまで言語表現を基盤として研究し、常に談話という現象と照らし合わせて観察・分析・考察する。

文を中心とした言語学と言うと、ある一定の研究領域が認められる。談話を出発点とした言語学という分野は、その領域、対象となる言語現象、分析の方法などが設立されていない。本書では談話言語学という領域を打ち立てて、日本語のディスコースに焦点を当てた場合、どんなことが研究の対象となり、どんな研究がなされ、またこれからどのような研究が試みられることが望ましいかを示しながら、その分野の全体像を描きたい。

昨今のディスコースを対象とした研究方法は、会話分析、談話分析、語用論、社会言語学、認知科学的アプローチ、コミュニケーション論、言語心理学、社会心理学と、その種類に事欠かない。そして日本の国語学の伝統には文章論があり、文章や段落の統括を中心とした研究がなされてきた。加えて文体論や作家論など、書き言葉の談話研究の伝統がある。また、もっと広く、クリティカル・ディスコース分析を中心とした談話研究のような間領域的な分野もあり、その裾野は広がる一方である。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

本書はこれらの動向を追うことを目的とせず、あくまで日本語の表現と直結して観察・分析・考察することを試みる。その分析には各種のアプローチを応用するが、ある分析の方法から出発して、それが日本語のディスコース現象に当てはまるか当てはまらないかということは、直接問題にしない。

筆者は、『会話分析』と『談話分析の可能性』で会話分析と談話分析の分野を紹介し、それぞれのアプローチの研究を報告した。今回は、より広範囲にわたって日本語の全体像を理解できるように、日本語表現を理論の枠組みにとらわれず、しかしあくまで筆者の言語観に基づいて概観する。特に『情意の言語学』で説明した言語観を基盤に、ディスコースの表現性を探る。その過程で、言語に関する分野で多くの研究者によって積み重ねられた研究から学び、その分析方法を応用していく。特に日本語で発表された研究と、英語で発表された研究の垣根を取り除き、両者の業績を参考にする。また、談話言語学では定性的分析も定量的分析も適宜取り入れる。つまり、分析する現象にふさわしい分析方法を、それに伴う限界も認めながら、選んで使うという立場を維持することにする。

学問は常に先人の業績に学ぶことから始まる。本書では、その性質上、筆者自身の過去の研究への言及が多くなり、他の研究については、限られた文献にしか触れていない。しかし、日本語研究・言語研究の業績は膨大であり、また今も新しい研究が試みられている。筆者は言語の学問に携わる多くの人々の偉大な業績に、深い感動と尊敬の念を抱いていることを記しておきたい。

本書で考察の対象となるデータは、はげしく変化する日本語の言語の実際、主に2000年代の言語現象から選ばれたものである。言語の実際を観察・分析・考察するという態度は筆者が一貫してとってきた立場であり、今回もいろいろなジャンルから、なるべく新しいものを対象とするように努めた。

今回試みた幾つかの研究で改めて認識させられたのは、言語はあくまで創造的行為であるということである。ディスコースには、それを創造した言語主体の情意を含む表現意図が表出し、そこには単なる情報の伝達を越えた遊びやおもしろさがある。そしてそこには、あたりまえのことであるが、主体が世界をどう見ているか、自分と相手や世界をどういう関係に置くのか、どんな自分を表現するのか、といった個人的な意味の創造がある。その流動的な日本語の談話における言語表現の役割を重視しながら、日本語のディスコースがどのように創造されているのかを理解したい。そして何よりも、言語表現は静的なものではなく、ダイナミックな出来事としてあることを明らかにしながら、日本語ディスコースの現象を、構成・レトリック・ストラテジーという側面から論じていく。

本書では、全体で談話言語学という研究分野が概観できるようにし、各章で談話言語学的アプローチが課題とするべき研究テーマについて紹介し、その中から幾つかのケースを実際に分析し報告する。そしてこれらの研究で明らかにされるディスコースの現象が、日本語の談話の全体的なすがたとどう関係しているかについて、考察を進めていくことにする。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

今回もまた本書の企画をあたたかく受けとめてくださったくろしお出版の皆様に感謝します。特に編集部長の福西敏広さん、今回のプロジェクトでお世話になった斉藤章明さん、ありがとうございました。

2004年早春
“On the Banks of the Old Raritan”
「ラリタン川の岸辺にて」
（ラトガース大学校歌より）

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目次

まえがき……i

第 1 章　談話としての言語 …… 1

1.1.　談話という現象 …… 1
1.2.　文章と会話の間：新言文一致体 …… 3
1.3.　ディスコースの創造と言語表現の役割 …… 5
1.4.　談話とジャンル …… 7
1.5.　日本語ディスコースのバリエーション …… 9
1.6.　談話へのアプローチ：構成・レトリック・ストラテジー ……13
1.7.　本書の構成 ……14

第 2 章　談話言語学：研究の対象と方法 …… 17

2.1.　談話言語学と談話分析 ……17
2.2.　談話言語学と＜場交渉論＞：意味と機能の捉え方 ……20
2.3.　言語主体とディスコースの表現性 ……21
2.4.　分析方法：定性的（qualitative）と
定量的（quantitative）分析の混合 ……23
2.5.　データと理論 ……24

第 3 章　日本語ディスコースの軸 …… 28

3.1.　パトスのレトリック ……28
3.2.　トピック・コメントという関係 ……30
3.3.　ディスコース・モダリティの重要性：主体の発想・発話態度 ……32

第 4 章　物語の構造 …… 34

4.1.　はじめに ……34
4.1.1.　背景 ……34
4.1.2.　関連研究課題の紹介 ……34
4.1.3.　本章で試みる研究課題 ……35
4.2.　物語説明文：ナラティブ構造とトピック構造の交渉 ……36
4.2.1.　データ ……38
4.2.2.　先行研究 ……38
4.2.3.　「心に届いた手紙」の全体構造 ……39
4.2.4.　物語説明文の構造 ……40
4.2.5.　構造を支える言語表現：時制 ……41

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4.2.6.　登場人物の提示 ……42
4.2.7.　トピック提示とディスコースの展開 ……43
4.2.8.　受け手の提示コンテキストとその変化 ……44
4.2.9.　「点字メニューで注文の喜び」の分析 ……47
4.2.10.　おわりに：言語表現と談話構造の触れ合い ……50
4.3.　ショートショート：ステージング操作とその表現性 ……50
4.3.1.　データ ……51
4.3.2.　先行研究：談話における「は」とステージング操作 ……51
4.3.3.　「バイトに夢中」のトピック構造とステージング操作 ……54
4.3.4.　ステージング操作と語りの視点 ……56
4.3.5.　「バイトに夢中」の語り方と表現意図 ……58
4.3.6.　「小部屋」のステージング操作とディスコースの表現性 ……59
4.3.7.　おわりに：ステージング操作と物語の創造 ……63

第５章　意見文・質問文・返答意見文の構成 …… 66

5.1.　はじめに ……66
5.1.1.　背景 ……66
5.1.2.　関連研究課題の紹介 ……70
5.1.3.　本章で試みる研究課題 ……70
5.2.　新聞コラム意見文の構成 ……71
5.2.1.　データ ……72
5.2.2.　先行研究 ……73
5.2.3.　「直言」の要旨と統括の型 ……74
5.2.4.　冒頭段落と末尾段落の構成要素 ……77
5.2.5.　コメント文とその分布 ……78
5.2.6.　コメント文と冒頭・末尾段落の関係 ……80
5.2.7.　段落内の構成：非コメント文からコメント文へ ……81
5.2.8.　おわりに：トピックからコメントへという流れ ……82
5.3.　質問文と返答意見文の呼応 ……83
5.3.1.　データ ……85
5.3.2.　先行研究 ……85
5.3.3.　質問文の構成：冒頭と末尾 ……87
5.3.4.　質問文の展開 ……89
5.3.5.　返答意見文の構成 ……89
5.3.6.　返答意見文の返答の形式と位置 ……91
5.3.7.　質問文と返答意見文のジャンル上の相違点 ……92
5.3.8.　おわりに：質問と返答の呼応 ……93

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 6 章　談話のレトリック：スタイルの選択と混用 …… 96

6.1.　はじめに ……96
6.1.1.　背景 ……96
6.1.2.　関連研究課題の紹介 ……98
6.1.3.　本章で試みる研究課題 ……98
6.2.　ダ体とデス・マス体：スタイルシフトの表現性 ……99
6.2.1.　データ ……100
6.2.2.　先行研究 ……100
6.2.3.　ダ体とデス・マス体の選択 ……101
6.2.4.　スタイルシフトの表現性 ……104
6.2.5.　感情のゆれとスタイルのゆれ ……106
6.2.6.　スタイルの選択と言語の創造性 ……108
6.2.7.　おわりに：スタイルと言語主体の表現意図 ……109
6.3.　借り物スタイルのレトリック ……110
6.3.1.　データ ……110
6.3.2.　先行研究：借り物スタイルと声の多重性 ……110
6.3.3.　借り物スタイルの表現性 ……112
6.3.4.　スタイル混合のレトリック ……115
6.3.5.　おわりに：他者の声を借りる時 ……117
6.4.　「だ」と「である」のシフト：言い切りのレトリック ……117
6.4.1.　データ ……118
6.4.2.　先行研究 ……118
6.4.3.　「だ」文・「である」文と統語上の特徴 ……119
6.4.4.　「だ」文・「である」文の視点と視座 ……121
6.4.5.　「だ」・「である」と「のだ」・「のである」 ……123
6.4.6.　語りの技法としての「だ」と「である」 ……126
6.4.7.　おわりに：「だ」と「である」で言い切るわけ ……129

第 7 章　文表現のレトリック …… 133

7.1.　はじめに ……133
7.1.1.　背景 ……133
7.1.2.　関連研究課題の紹介 ……133
7.1.3.　本章で試みる研究課題 ……134
7.2.　受身文：意味の多様性と受身的視点 ……134
7.2.1.　データ ……135
7.2.2.　先行研究 ……136
7.2.3.　受身文とその分類 ……137

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

7.2.4.　結果描写の受身 ……138
7.2.5.　情意表現の受身 ……140
7.2.6.　結果描写の受身と情意表現の受身の比較 ……142
7.2.7.　メタ言語表現の受身 ……144
7.2.8.　受身的視点と行為的視点 ……146
7.2.9.　えひめ丸沈没事故の被害者意識と受身文 ……149
7.2.10.　命題の格関係に表現される受身的な意味 ……149
7.2.11.　おわりに：受身的に把握する世界 ……150
7.3.　否定文：否定する理由とそのレトリック ……151
7.3.1.　データ ……152
7.3.2.　先行研究 ……152
7.3.3.　否定表現・否定文とは ……156
7.3.4.　否定文と肯定文のコントラスト ……156
7.3.5.　否定文のレトリック ……158
7.3.6.　否定して肯定するパターン：メタ言語的否定表現 ……161
7.3.7.　発話デザインとモダリティ否定形 ……162
7.3.8.　否定を繰り返す意味 ……163
7.3.9.　否定文の分布 ……165
7.3.10.　『冷静と情熱のあいだBlu』と
『冷静と情熱のあいだRosso』の否定表現……168
7.3.11.　おわりに：否定文のポジティブな意味と機能 ……175
7.4.　会話導入文：話す声が聞こえる類似引用の表現性 ……176
7.4.1.　データ ……176
7.4.2.　先行研究 ……177
7.4.3.　会話導入文とその談話上の機能 ……179
7.4.4.　「みたいな」で括る技法 ……181
7.4.5.　類似引用の特徴 ……183
7.4.6.　類似引用の種類と表現性 ……185
7.4.7.　会話と描写のあいだ ……190
7.4.8.　おわりに：言語に潜む会話性 ……191

第８章　文頭と文末のストラテジー …… 195

8.1.　はじめに ……195
8.1.1.　背景 ……195
8.1.2.　関連研究課題の紹介 ……196
8.1.3.　本章で試みる研究課題 ……197
8.2.　接続表現「だから」：論理的な意味の向こう ……197
8.2.1.　データ ……198

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

8.2.2.　先行研究 ……198
8.2.3.　ディスコースにおける「だから」の周辺 ……200
8.2.4.　「だから」の機能とその位置付け ……204
8.2.5.　情意の表現としての「だから」：
「分かってよ」というアピール ……204
8.2.6.　言語主体の態度を表現する「だから」：
説明の予告と挑戦的な態度の表現……209
8.2.7.　会話行為の管理のために使われる「だから」：
「聞いてよ」という注意とトピック管理 ……212
8.2.8.　「だから」と人間関係：目上・目下と自分のイメージ ……214
8.2.9.　おわりに：言語表現と人間関係の調整 ……216
8.3.　「というか・ていうか」：躊躇感と本音の共存 ……217
8.3.1.　データ ……218
8.3.2.　先行研究 ……219
8.3.3.　「というか・ていうか」の意図するもの ……221
8.3.4.　文末の「というか・ていうか」と情意 ……222
8.3.5.　文頭の「というか・ていうか」と本音の前触れ ……225
8.3.6.　「というか・ていうか」と発話行為 ……229
8.3.7.　「というか・ていうか」と共話行為 ……232
8.3.8.　文中の「というか・ていうか」 ……233
8.3.9.　おわりに：相手との繋がりを求めて ……235

第 9 章　語句のストラテジー …… 238

9.1.　はじめに ……238
9.1.1.　背景 ……238
9.1.2.　関連研究課題の紹介 ……239
9.1.3.　本章で試みる研究課題 ……240
9.2.　固有名詞の使用・非使用：「えひめ丸」・「原潜」と呼ぶ理由 ……240
9.2.1.　データ ……241
9.2.2.　先行研究 ……241
9.2.3.　えひめ丸とグルーンビルに関する指示・照応表現 ……245
9.2.4.　＜えひめ丸―原潜＞というストラテジー ……249
9.2.5.　＜情的視点＞と指示・照応表現 ……252
9.2.6.　部外者の立場と政治外交のディスコース ……255
9.2.7.　トピック構造と＜えひめ丸―原潜＞ストラテジー ……256
9.2.8.　おわりに：言語表現と感情的な思い入れ ……259
9.3.　名詞句：付託的表現効果を狙って ……259
9.3.1.　データ ……260

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

9.3.2.　先行研究 ……261
9.3.3.　名詞句の種類と特徴 ……262
9.3.4.　名詞句と動詞文との比較 ……264
9.3.5.　雑誌解説文におけるトピック構造と名詞句の役割 ……266
9.3.6.　ノンフィクションの名詞句の表現性 ……269
9.3.7.　名詞句の分布とジャンル ……273
9.3.8.　おわりに：ジャンルと表現性 ……275

第 10 章　談話言語学と日本語のすがた …… 277

10.1.　談話言語学の意義と方向 ……277
10.2.　日本語のすがた：その解明と意義 ……279

日本語参照文献……283

英語参照文献……291

使用データリスト（ジャンル別）……300

人名索引……305

事項索引……310

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章
談話としての言語

1.1. 談話という現象

私達が日常経験する言語は、ひとつの出来事としてある。それは、必ずしも独立した句や文という単位で存在するわけではない。実際の言語表現には、「うん、いいよ」などという短い間投詞的な表現もあり、「ラーメン!」などと統語上は文と言えない語句だけで表現することも多い。しかし、言語表現は一見短い単位で区切られていても、例えば「うん、いいよ」とか「ラーメン!」などという表現も、ある出来事としての言語現象の流れの中で使われることを前提としなければ、その意味を正確に把握することはできない。何分間にもわたるスピーチやラジオのニュース番組、日常会話、テレビドラマ、バラエティ番組、また、新聞記事や広告文のコピーから、一冊の小説に至るまで、言語現象はある出来事として創造された談話の流れとして存在する。

伝統的な言語学では文を最大枠として、節、句、語彙、形態素、音韻、音素といった単位を分析する姿勢をとってきた。しかし周知の通り、特にここ20年余り談話や文章を単位として、言語現象を観察する姿勢が顕著となってきた。それは、会話分析、談話分析、語用論、社会言語学など一連の研究領域で、学問の対象となる現象が大幅に拡大してきたことに支えられている。

言語が文より大きな意味の単位を成すことは、筆者も20年来指摘してきたことである。筆者は談話を「実際に使われる言語表現で、原則としてその単位を問わない。単語一語でも談話と言えるが実際には複数の文からなっていることが多く、何らかのまとまりのある意味を伝える言語行動の断片」（メイナード1997:12-13）であると定義した。本書でもこの定義を引き継いで、日本語の談話に焦点を当てる。談話の研究が盛んになってきてはいるものの、具体的な日本語のディスコースはどんな様相を見せているか、何をどのように伝えているのか、という疑問に対する答えはまだ十分とは言えず、まだ探求すべき課題が山積している。

本書は、言語をコミュニケーションの出来事として捉え、談話全体から次第に小さな単位に目を向けて、現代の日本語のディスコースのすがたを観察・分析・考察するものである。同時にこの姿勢は、単に分析単位の大小や、分析の方向性の問題

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 2 章
談話言語学：研究の対象と方法

2.1. 談話言語学と談話分析

筆者は本書で、ある種の言語研究を談話言語学と呼ぶのであるが、談話言語学はいわゆる談話分析の研究領域と類似している。筆者は従来、談話分析という表現をdiscourse analysisの日本語訳として使ってきたのだが、discourse analysisという分野自体が変化していること、また日本でも談話分析という表現が広く使われるようになるにつれ、いろいろな分野や文脈によってその領域や受け取られ方が様々になっていることなどから、談話分析とは異なった名称が必要であると思っていた。

そこで、筆者が今まで試みてきた研究の立場を、言語表現をあくまで談話という言語の実際の中で分析し、さらにある言語のディスコース現象の全体像を理解することを目的とするという意味を込めて「談話言語学」と呼びたい。ちなみにこの英訳discourse linguisticsは皆無なわけではないが、学問領域を指す表現としては余り使われていない。

もっとも談話言語学は、談話分析という研究領域で筆者がとってきた言語に対する基本的な姿勢や分析方法と異なるわけではない。それにもかかわらず談話言語学という表現を使うのは、談話分析という表現が掴み所のないものになっていることを憂慮して、筆者が考えてきた言語へのアプローチを、ひとつの研究領域として確立する必要性を感じたからに過ぎない。

実際、昨今の談話分析や談話研究の動向を見ると、その領域の膨大さが印象に残る。多くの研究者が談話現象を広義に捉えていて、かかわる学問領域も多岐にわたる。言語学をはじめとして、応用言語学、言語心理学、コミュニケーション論、社会学、心理学、認知科学、文化人類学、などと広範囲に及んでいて、当然のことながらその研究目的も方法論も異なっている。[注1]

一方海外では談話研究（discourse studies）という表現で、研究領域が拡大している。例えばvan Dijk（1995, 1997）は、ディスコースと社会との関係を重視する傾向が強く、分析の対象も政治のディスコース、医療施設のディスコース、性の意識や人種・文化意識とディスコースの関係などに及んでいる。Gee（1999）はDiscourse Analysisという名称を使ってはいるが、ある社会や文化がディスコースの

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 3 章
日本語ディスコースの軸

3.1. パトスのレトリック

日本語の談話表現は、その内部にいろいろな矛盾を含みながらも、確認できるある傾向を見せている。それは、筆者が『談話分析の可能性』、『情意の言語学』、および *Linguistic Emotivity* (Maynard 2002a) で提唱したパトスのレトリックである。パトスのレトリックとは、日本語のディスコース全体に認められるレトリックの技法である。折に触れて指摘してきたことであるが、日本語のディスコースのどれもがその特徴をすべて備えているわけではなく、ジャンルによってはそうでないものもある。また、ある傾向、例えば名詞句による付託的効果を狙った表現が、頻繁に使われるディスコースと、そうでない場合とがある。確かに日本語のディスコースは常にその変動性を示すのであるが、そうであってもその基本軸としてパトスのレトリックと呼べる次のような傾向があることは否定できない。

パトスのレトリックについて、まず筆者が『談話分析の可能性』で述べたことから復習しておきたい。筆者は幾つかの日本語の談話現象を分析したが、(特に、提題の「は」、テキストを結ぶコメント文、名詞化表現、引用表現など) そこには次のような共通点が見られた。[注1]

「は」は概念化されたトピックを提示するための手段であり、コメント文は言語主体が自分の思いを表現するためにある。つまり、提題の助詞を用いることは、トピックとして区切ることであり、その区切られた概念「について」感性的・感情的な態度も含めて語るのが、トピックについて結ぶ日本語の陳述作用、つまりコメント文的表現である。

名詞化のプロセスは出来事を概念として把握することであり、引用のプロセスは「誰か」が「言う」(と想定される) その声を、言語のイメージを媒介に概念として捉えることである。名詞化と引用はともに区切るという分離作用と同時に、それについて結ぶという結合作用をも促進する。それは出来事を名詞化することが、それについてコメントすることを促すからに他ならない。要するに『談話分析の可能性』で扱った現象は、ある出来事を概念化してまとめ、その切り取った現象を言語表現として相手に向けて表現する時、主体が「について」コメントするという表現

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 4 章
物語の構造

4.1. はじめに

4.1.1. 背景

本章では、談話の中でも従来盛んに研究されてきた物語（narrative）のジャンルについて考察する。もちろん物語は談話の一つのジャンルに過ぎないのだが、その構造が比較的パターン化したものであり、研究しやすいという事情があること、また、他の学問分野でもその文化的な意味や、ジャンル混合の現象などと関連して注目を浴びてきたことなどの理由から、比較的広範囲にわたって研究対象となってきた。

物語の研究で談話言語学と触れ合う分野には、タグミーミックスと社会言語学という2つの流れがある。前者の流れを代表するLongacre and Levinsohn（1978）は、民話の構造について報告したもので、幾つかの民話の構成要素を提示し、さらに物語の各部分が結束性の糸（strands of cohesion）によって結ばれていることを論じる。社会言語学的なアプローチではLabov and Waletzky（1967）やLabov（1972）が代表的な研究である。社会言語学では研究者がその対象者をインタビューし、その録音を文字化してデータとしたディスコースを研究することが多い。この場合のナラティブとはoral narrativeであり、個人的経験物語と言える類のものであり、それがどのような構造になっているかを明らかにする。これらの研究については、さらに4.2.で復習する。

本章では物語の構造の研究を背景として、具体的に日本語の物語的なディスコースを考察していく。その際、談話言語学の立場から、具体的な言語表現がディスコースの創造にどのような役割を果たしているかにも焦点を当てる。

4.1.2. 関連研究課題の紹介

物語の構造と関連して、幾つかの研究課題が考えられる。まず、全体構造を支えるトピックの連鎖や構造が、物語の構成要素とどのような関係にあるかを理解することで、物語全体の意味を理解することができる。文の連接を支える指示詞や接続表現、また、内容の順序付けをする接続表現などが、物語の構成要素とどのような関係にあるかを調べることも興味深い。ある文型が異なった物語の構成部分にどの

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 5 章
意見文・質問文・返答意見文の構成

5.1. はじめに

5.1.1. 背景

前章で扱った物語のジャンルと対照的なジャンルに、意見文がある。広義の意見文とは、書き手が考えていることを表明することを目的とする。概して意見文は物語と違って、はっきりした構造が定着していないようである。書き手がどのような順序で情報を提示するかがその全体を構成するという意味で、本章では第4章で用いた「構造」ではなく、談話の「構成」という見方をする。

意見文には社説や読者の投書なども含まれるが、最も典型的な意見文は、新聞や雑誌に掲載される時評やコラムであろう。コラムにも幾つかのタイプがあり、それぞれその内部構造にも差があるものと思われるが、根本的には書き手の意見がどのように表明されるかという一点に絞られる。もっとも、書き手の意見が明言されず、散文・エッセーと類似したものもあるのだが、一般的には意見文は書き手が何らかの助言をしたり、意見を述べたり、解決法を提言したりするものと考えられている。

このような広義の意見文は、主に文章論の分野や、対照レトリック論の分野で研究されてきた。本章で具体的に考察するのは限られたジャンルだけだが、ここで文章論や対照レトリック論の研究の動向を見ておきたい。

文章論では、中心となる情報が談話のどの部分で提示されるかということが研究テーマとなることが多く、それは文章の統括という概念で扱われてきた。[注1] 統括機能とは、文章や段落全体の内容をまとめる表現の働きであり、それは段落の「中心文」と同様に、文章全体をまとめる機能を果たす。文章全体をまとめる統括機能のある段は「中心段（落）」とも呼ばれる。佐久間（1999:184）は、中心段を「文章の主題をまとめて一編を完結させる統括機能を有する段」と定義している。さらに、『主題の統一』とは、文章の主題を表す中心段が他の段を同じ主題を支える一まとまりの表現として統括するということである」と付け加えている。

佐久間（1999:184）によると、日本語の文章の基本的な構造類型には、次の六種がある。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 6 章
談話のレトリック：スタイルの選択と混用

6.1. はじめに

6.1.1. 背景

一般的に談話のスタイルにはダ体（普通体）かデス・マス体（丁寧体）かという問題だけでなく、語彙の選択から談話全体の調子、広義の文体・話体に至る様々な現象が関係している。スタイルは、ディスコースのすべてに何らかのかたちで表現されるため、その使用範囲は広く、その現象も多岐にわたっている。

日本語のスタイルは、従来敬語と関連しながら普通体・丁寧体として扱われてきたことでも知れるように、社会言語学上の要素との関係で論じられてきた。しかし、実際、私達の日常生活においては、スタイルは、年令・地位・性別などの当事者の背景や、目上・目下、また話し手と聞き手の性別関係など、コミュニケーションの場（面）によってのみ決定されるものではない。また、一度選ばれたスタイルがずっと維持されるわけでもなく、常にシフトしながらミックスされて使われることも周知の通りである。

日本語のスタイルに関連した研究は数多くあるが、その中でスタイルのシフトや混用といった問題が次第に研究の対象となってきている。スタイルシフトは、言語と感情の密接な関係や、言語の創造性を認めれば当然のことなのであるが、その研究はまだ十分ではない。本章では、特にスタイルの混用やゆれを研究課題とするので、話し言葉を対象とした先行研究も含めて復習しておこう。

岡本（1997）は話し言葉の研究で、教室談話における丁寧体と普通体のシフトについて、特にそのメタメッセージ機能に注目した研究報告である。教師や生徒が使う文体のシフト自体が、そのコミュニケーションをどう捉えているかを伝えるわけで、それには、状況規定、相手規定、自己規定、対人関係規定などが含まれる、としている。具体的には、丁寧体は、コミュニケーションの場を公的場面と理解し、クラス全体を相手として自己を「教師」または「生徒」と規定し、相手をソト扱いすることを伝えるスタイルであり、普通体は、非公式な場面で個人または限定された人達に向けて自己を個人と捉え、相手をウチ扱いすることをメタメッセージとして伝える機能を果たすと説明している。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章
文表現のレトリック

7.1. はじめに

7.1.1. 背景

談話言語学のアプローチでは、言語表現が創造するディスコースにどのような役目を果たしているかがテーマとなることは何度も述べた。文法の中心となる文型についても同じことが言える。従来言語学では文法を中心とした統語論のレベルで文の型について多くの研究がなされ、いろいろな文の特徴が明らかにされてきた。例えば、肯定文、否定文、疑問文、受身文、使役文などの文法構造である。

本章では異なった形態をとる種々の文が、ディスコースでどのような表現効果を目的として使われ、どのような分布状況を見せているのか、根本的にはなぜこのように異なった文が選ばれるのかという問いかけをする。

文の談話上の機能は意味論や語用論でも論じられてきたが、その研究はまだ十分ではない。本章では限られた文型の分析のみになるが、それぞれの研究に関連した背景は各項で紹介することにする。

7.1.2. 関連研究課題の紹介

この研究領域にはこれから従事するべき研究課題が山積している。あらゆる文型について言えることだが、例えば疑問文ひとつをとってみても、それが談話構造にどのように貢献しているか、ディスコース全体で実現する言語主体の発話・発想態度とどう関係しているか、が問われる。また、疑問文の周辺には、否定疑問文、間接疑問文、修辞疑問文などもあり、それぞれの機能が研究課題になる。

文の中でも余り研究されなかった種類に注意を向けることも大切であろう。例えば感嘆文や、述語が省略されたと見られる句のような文などである。筆者は今まで感嘆文や独立名詞句の研究を手掛けてきたが、それらが異なったジャンルでどのような機能を果たしているのかなど、課題は多く残されている。そして談話言語学の観点から言えば、特にそれらがディスコースのどのような表現性を実現しているかを探ることが大切である。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 8 章
文頭と文末のストラテジー

8.1. はじめに

8.1.1. 背景

文頭と文末は言語の主体と相手が遭遇する場であり、その発話のかたちにいろいろ興味深い特色が見られる。接続表現が文の始めに、そして終助詞が文の終わりに使われることでもその重要なことが知れるのであるが、それ以外にも、前置きの挿入句を使ったり接続表現を文末に置いたりして、発話の始めと終わりの調整がなされる。

もっと視野を広げれば、日本語の陳述やモダリティの表現が文末で重要な意味をもたらすこと、またこれらの現象が重要な研究領域となっていることなどでも、文末の表現性がいかに重要かが分かる。本章では、文頭と文末の操作に焦点を絞り、その操作がディスコース全体の展開や、談話における相互的な言語行為とどのようにかかわっているかを探る。

筆者は、ディスコースとモダリティの関係をディスコース・モダリティ（discourse modality）（Maynard 1993）という概念で捉えたが、その際にも、接続表現である「だから」と「だって」について論じたことがある。近年「だから」と「だって」をはじめ、語用論の枠組みでディスコース・マーカー（談話標識）の研究の一部として、文頭や文末の言語表現に関心が集まっている。実際、語用論の分野では、ディスコース・マーカー（discourse marker）に加えて、プラグマティック・マーカー（pragmatic marker）という概念が使われている。一般的にディスコース・マーカーは プラグマティック・マーカーの一部であり、プラグマティック・マーカーの方が広い範囲の現象を扱うという理解がなされている（Andersen and Fretheim 2000）。ディスコース・マーカーは従来、そのディスコースの前後の情報との結束性を中心に論じられることが多かった。プラグマティック・マーカーは、情報の結束性以外にも、言語行為の管理や、もっと幅広く、命題に関係する主体の態度つまり、ディスコースレベルのモダリティを指標するものと考えられている。筆者は、以前Maynard（1993）でdiscourse indicatorという概念で談話レベルの陳述表現を捉えたことがあるが、それと似ていると言えよう。

このように広義に捉えたプラグマティック・マーカーは、文頭と文末にのみ用い

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 9 章
語句のストラテジー

9.1. はじめに

9.1.1. 背景

本章では、語句が談話の創造にどのように使われるかを研究の課題とする。言語表現として使われる語句はそれ自体が独立しているものであっても、常にディスコースの一部として機能を果たす。具体的には、ディスコースの展開を可能にしたり、結束性を実現したり、ディスコース全体に流れる表現性を実現するために作用したりする。

日本語には従来、陳述副詞（または文副詞）と呼ばれてきた一群の語句があり、それらは情報というより、言語主体の発想・発話態度を表現するために用いられる。陳述副詞の研究には、例えば「やはり・やっぱり」の研究（西原1988、森本1994など）がある。筆者（Maynard 1993）もディスコース・モダリティの観点から「やはり・やっぱり」の考察をしたことがある。Tanaka（1997）は関連性理論からのアプローチであるが、「やはり・やっぱり」が命題構造ではなく、主体の態度を示すという一連の考察と矛盾しない。陳述副詞に関する研究については、主体の態度がディスコース全体の表現性とどうかかわっているかを探ることなどが、課題として残されている。

指示詞は、ディスコースの構造やその描かれた世界と密接に関係し合っていると思われるが、その機能が何であるかということも興味深い問いかけである。国語学の分野では、「こそあど」に関する研究が多くなされてきたのは周知の通りである。また、英語とコントラストすることで、ディスコースにおける指示詞の機能が明らかになってきている。例えば、日本語と英語の指示詞を比較研究した新村（1997）およびNiimura（2003）では、日本語の現場指示表現について、話し手の直接経験を含む現場依存度が高いことを挙げ、心理的距離よりもむしろ物理的距離が優先することを指摘している。このような日本語の指示表現がディスコースの世界にどのような指示関係を創り出すのか、それがどのようなディスコースの表現性に繋がっているのか、などを探るのも興味深い。また、辻本（2001）は、英語の *this* と *that* の使用について語用論の立場から論じている。談話におけるかたまりを指

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 10 章
談話言語学と日本語のすがた

10.1. 談話言語学の意義と方向

筆者は本書で、いわゆる談話分析や談話研究の領域とは異なった、談話言語学という研究領域について論じてきた。その分野の課題や研究の方法について説明し、またその観点から具体的に幾つかの現象を、観察・分析・考察して報告した。このような学問を追及することには、どんな意義があるのだろうか。

まず、いろいろな日本語研究の中で、最も率直な問いかけを可能にするという点がある。つまり、具体的なディスコースで何をしているか、という基本的な問いかけに答える場を提供する、ということがある。私達が選ぶひとつひとつの言語表現が、ディスコース現象にどんな効果をもたらすか、という根本的な問いかけに、正面から答える場を提供する。

次に、談話言語学は、いろいろな分析方法を応用し、広範囲のジャンルから抜き出したディスコースの実際を分析するので、日本語の全体像が明らかになるという利点がある。語彙や文法といった現象のみを扱っていると、出来事として存在する言語の実際の、その意味を捉えることができない。

具体的なディスコースを観察・分析・考察することには、他にも利点がある。私達が日常「日本語」という表現を使う時、それが具体的にどんな言語の使用例を指しているのか、はっきりしないことが多々ある。談話言語学のアプローチでは、必然的に言語のバリエーションを直視することになり、あるバリエーションとして存在する日本語のその実態を掴むことができる。

そして、何よりも、言語を談話から始まり、談話に終わる現象として考察することは、ディスコースの表現性を理解するために便利である。ここで言語が表現する意味や情意とは、あくまでディスコースの中の流れとしてあることを確認しよう。遠く冨士谷成章を引き合いに出すまでもなく、言語の意味はディスコース全体に響きわたる効果としてある。野村（2003）も述べていることであるが、例えば感情表現も、談話構造上のとりまとめとして機能したり、話題のまとまりとの関係で意味を持ったりするのである。言語の意味は部分の単なる集合ではなく、その総体で実現するものとしてある。その全体の意味は、ディスコースの複数のレベルや側面

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers